

「自己を見つめ、互いを認め合いかわりあう子どもの育成」

～互いのよさや違いを認め合う人間関係づくり～

＜三年次計画の一年目＞

I 主題設定の理由

1 子どもたちの実態や地域の教育課題

(1) 子どもたちの実態

本校は、帯広市の中心部に位置し、学年単学級の小規模校である。子どもたちは、明るく素直で、体を動かすことを好み活動的である。学年の枠を越えて子ども同士の関係は良好で、子どもと教師とも密接な関係にある。学校評価アンケートでは、ほとんどの子どもが「先生や友達から自分のよさを認められている」「学校は安心して楽しい」「いじめがあった時はすぐに相談できる」と回答している。学校独自に行っているアセス（学校・学級適応感尺度）においても、「生活満足感」や、友人関係が良好で、友達への援助や関係をつくる「向社会的スキル」をもっているという結果であった。これは本校が取り組んできた道德教育を基盤とした教育活動の成果であり、今後も継続していきたいと考える。

(2) 特別支援教育を取り巻く環境

近年、障害者差別解消法の公布や合理的配慮という考え方の導入など、特別支援教育を取り巻く環境も大きく変わりつつある。障害者そのものへの理解は少しずつ進んできているが、「一人一人の違いを受け入れ、尊重することの大切さ」を理解するという点では、まだまだ十分に浸透しているとは言えないのが現状である。本校の特別支援教育では、研究テーマとリンクさせながら、「違いを尊重し、互いのよさを認め合う」という心を育んでいくことを日々の学習や生活で大切にしていきたいと考える。

(3) 保護者・地域の課題

熱心で協力的な保護者・地域ボランティアがいる一方で、子どもの養育環境に課題がある家庭と二極化傾向にある。こうした状況を視野に入れながら、保護者・地域参加型の道德教育を推進したいと考える。

2 学校経営グランドデザイン

今年度の本校の学校経営方針の中に、道德教育を中心に据え、全教育活動を通して道徳的实践力を身に付け、道徳性の育成を目指すことが示されている。道德教育を通じて育成される道徳性は、「豊かな心」はもちろん、「確かな学力」や「健やかな体」の基盤であり、子どもたちの「生きる力」を根本で支えるものである。これを受けて、校内研究では、「道徳の時間」の指導の工夫や、対話や討論など言語活動を重視した指導を進める。さらに、総合単元ユニット方式を取り入れた体験的な活動や問題解決的な学習を通して、子どもたちに道徳的实践力を身に付けさせ、人格の基盤となる道徳性を育成していきたいと考える。

3 教育の動向

「特別な教科道徳」が平成30年度から実施される。背景には、いじめ問題の対応や生命を尊重する心の育成が重要とされている。道德教育を通じて、個人が直面する様々な事象の中で、状況を深く見つめ、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考えるなど、人間としてよりよく生きていくために必要な基本的な価値観を学び、道徳性を育成していく必要があるとされている。

本校においても、3年先を見据え、教育課程の改善や、指導内容の重点化、指導方法の工夫など準備する必要があると考える。

以上のことから、本主題を設定した。

II 研究仮説とその視点

本研究では、次の仮説を設定し検証することとする。

1 研究仮説

- ① 道徳的領域において、心に響く資料の効果的な活用や、思いや考えを伝え合い自分の生き方を見つめなおす指導方法を工夫すれば、一人一人の子どもが自他の思いを大切にし、信頼・協力し合える子どもが育つであろう。
- ② 総合単元ユニット方式を取り入れることにより、日常生活や全教育活動の中で補充・深化・統合を図ることができ子どもたちの道徳性をより養うことに繋がるだろう。

2 検証の視点

検証を進めるにあたり、次の3つの視点をおく。

- 一年次・・・道徳の学習を進めるなかで子どもの反応をみると、総合単元を再構築する必要が生じてきた。子どもの意識や思考に沿った総合単元ユニットができたか。
- 二年次・・・道徳の時間において、子どもの姿を見取り、意識を追究する方法は適切だったか。
- 三年次・・・「社会を生き抜く力」を感じることでできる子どもの姿が、総合単元学習のどのようなところでどのような表現でみられたか。

III 研究の具現化

研究の柱 I 授業づくり

本校では授業づくりに大切にしたいことを8つにしぼり意識統一を図った授業づくりを目指している。

1 事前アンケートによる実態把握

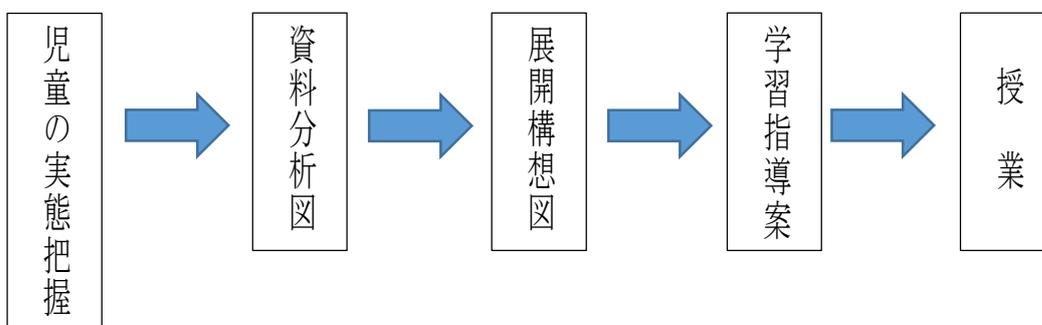
- ① 事前アンケートを実施することにより児童の実態を把握し、課題意識をもたせることで児童自らが問題を解決する思考の流れとなることをねらいとする。

※低学年など記述式の前アンケートの実施が難しい場合、「体験を想起する」場面で実態を把握する発問を入れるなど、発達段階に応じて対応していく。

※年間35時間すべての時間にアンケートを実施するのではなく、総合単元ユニット方式における道徳の時間など、要となる重要内容項目の場合実施する。

② 発問の工夫

○事前アンケートによる実態把握と資料分析をもとに展開の構想を練り、中心発問と補助発問の工夫をする。

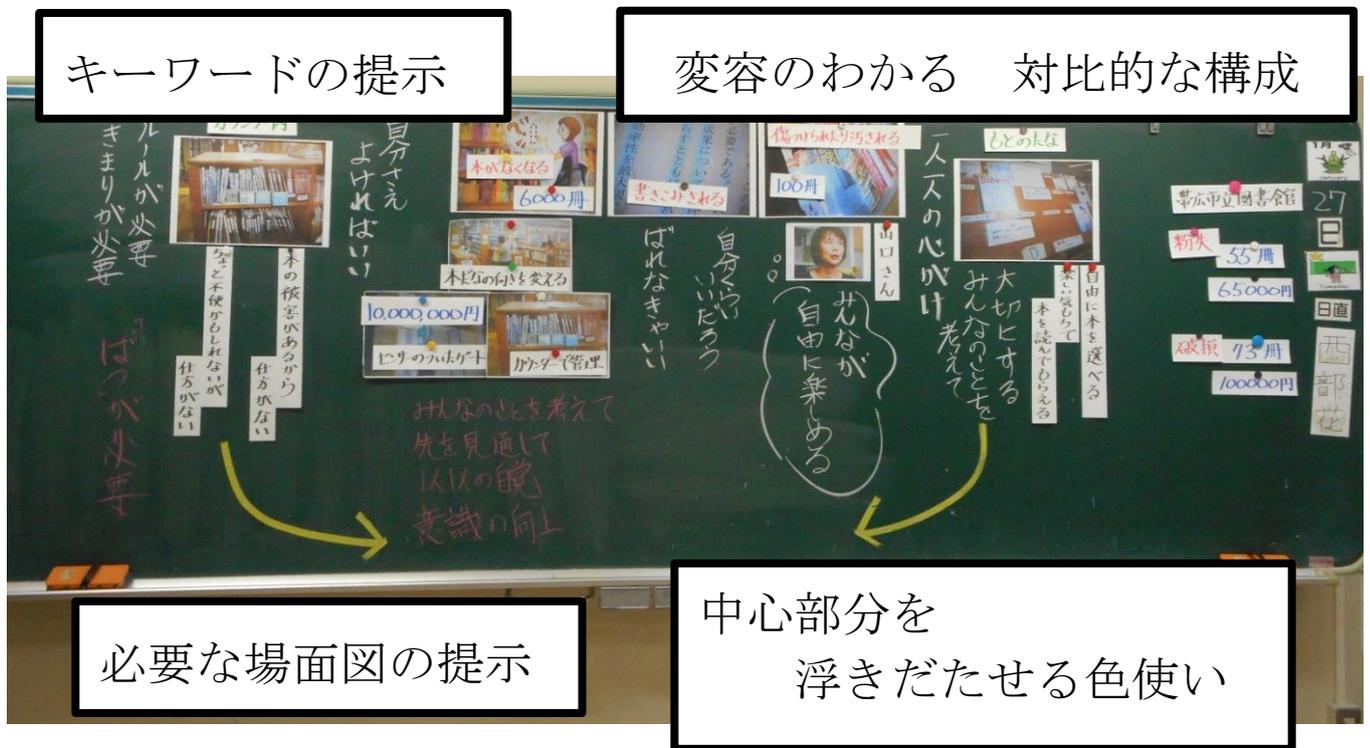


○授業づくりで大切にしたいこと

帯小の道徳 スマイリング 8 ～ 子どもたちの心がかがやく 8つの意識統一 ～

- 1 ねらいはすっきり明確に
- 2 導入はさらっと外さず本時の世界へ
- 3 無理なく無駄なく基本発問
- 4 中心発問が命です
- 5 自己を見つめる「書くタイム」
- 6 自己との対話「自己を見つめる」
- 7 道徳ノートは宝物
- 8 板書でトーク 思考の助けになる板書

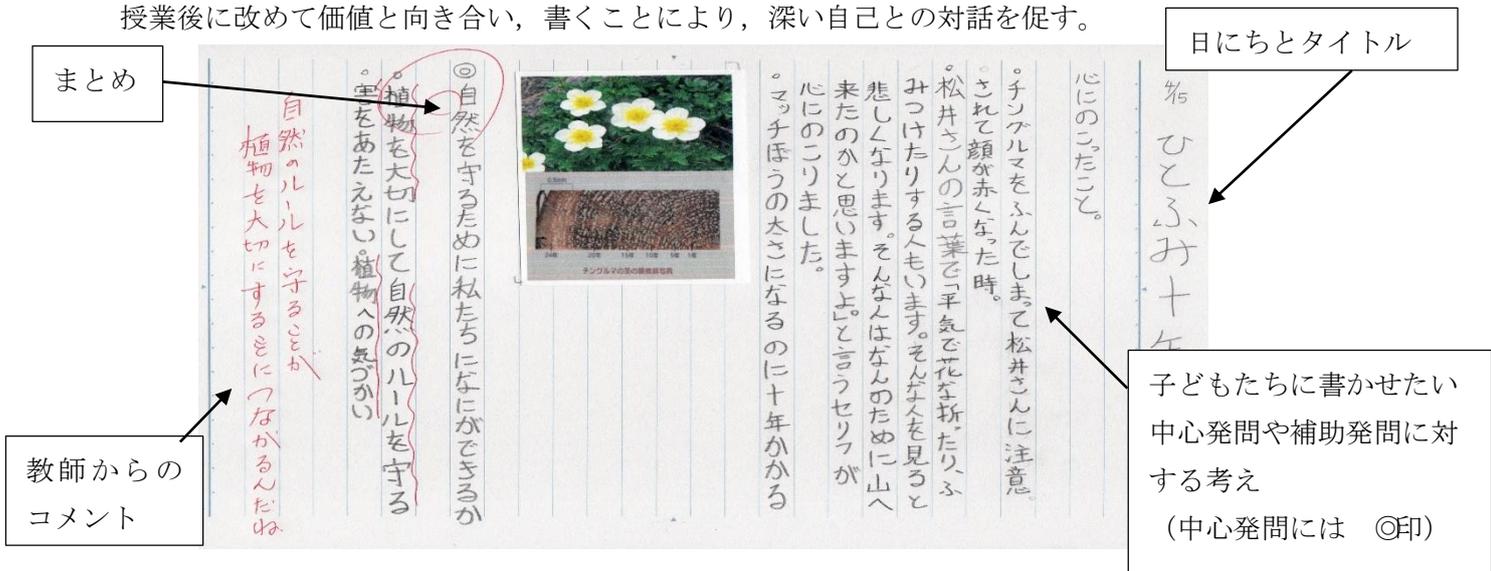
2 板書の工夫



3 書くタイム

① 道徳ノートの活用

授業後に改めて価値と向き合い、書くことにより、深い自己との対話を促す。



② 私たちの道徳の活用

目標に向かって努力を重ねた人たち



豊田佐吉 (一八七二—一九三〇)

発明家。実業家。「お金も教育もない自分は、発明で人の役に立とう。」と決心し、母に家をさせようと、織り機の改良を始める。外国製の織機の仕組みを調べ、苦勞を重ねて何度も試作をし、国産力織機を独力で発明。その後、織機会社を設立し、世界初の完全な自動織機を開発、生産して産業の発展につくした。



森光子 (一九〇一—二〇一三)

女優。十五歳で映画デビュー。脇役を務める期間が長かったが、四十歳の時、小説家林芙美子の半生をえがいた舞台「放浪記」(菊田一夫作演出)で初めて主役を演じる。これが代表作となり、上演回数二〇七回を重ねるといふ偉業を成しとげた。八十九歳まで主演舞台上に立ち続け、生涯現役をつらぬいた。



向井千秋 (一九五二—)

宇宙飛行士。医学博士。幼いころから「医者になりたい」という夢をもち、努力を重ね、外科医となる。地球を外側から見たいと思うようになり、宇宙開発事業団(現在のJAXA)の宇宙飛行士に応募し、選ばれる。一九九四年、アメリカ航空宇宙局のスペースシャトル「コロンビア号」のミッションに参加。日本人初の女性宇宙飛行士となる。

私が学びたい人物

●あなたには、その生き方にあこがれる人がいますか。その人は、どのような夢をえがき、どのような努力をしたのでしょうか。調べてまとめてみましょう。

人物名 藤田 鳴子
その人の夢 小説家になること
どのくらい努力をしたか 毎日朝早くから晩まで勉強し、読書もたくさんした。また、英語も勉強した。夢を叶えるまで諦めず努力した。

人物名 藤田 鳴子
その人の夢 小説家になること
どのくらい努力をしたか 毎日朝早くから晩まで勉強し、読書もたくさんした。また、英語も勉強した。夢を叶えるまで諦めず努力した。

偉人と苦勞を希望するさまざまなましよう

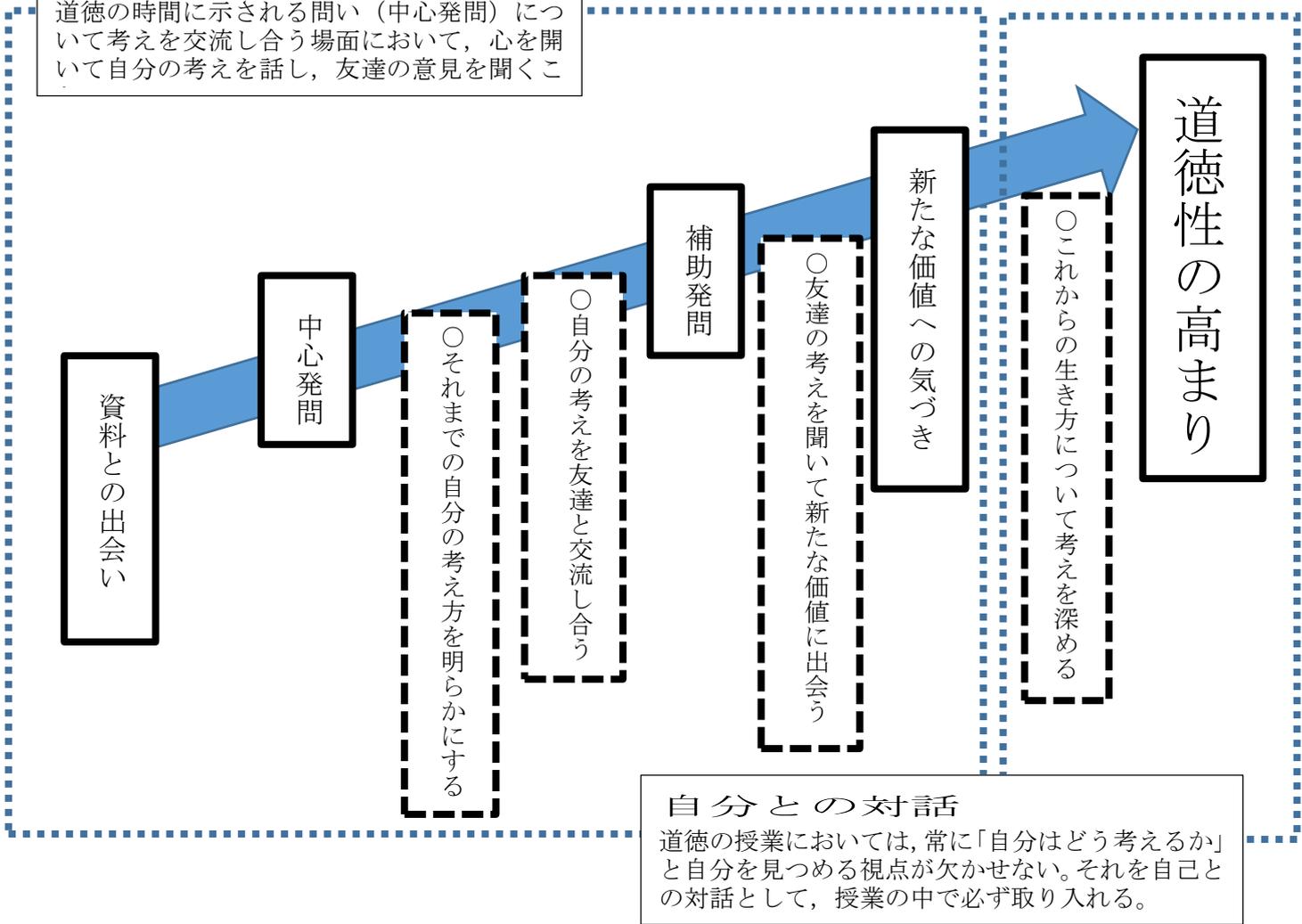
直接書き込む活用の例。
※国語の読書単元と合わせるなど様々な活用方法があります。

たくさんの挫折やえってきたのです。いそれを確かめてみ

4 道徳の時間における対話

相手との対話

道徳の時間に示される問い（中心発問）について考えを交流し合う場面において、心を開いて自分の考えを話し、友達の意見を聞くこ



自分との対話

道徳の授業においては、常に「自分はどう考えるか」と自分を見つめる視点が欠かせない。それを自己との対話として、授業の中で必ず取り入れる。

目指す対話の姿

	友達の考えを聞く	友達に考えを話す	友達と話し合う
低学年	<ul style="list-style-type: none"> うなずきながら聞く。 大事なことを落とさないように聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達を見ながら、はっきりゆっくり大きな声で話す。 体験したことを思い出しながら話す。 理由をつけて最後まで話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの話に集中する。 話題に沿って話をする。「私は～だと思います。」
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えと比べながら聞く。 質問したいことを見つけながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 理由や事例をあげながら話す。「どうしてそう思ったかという。」 体験と結びつけて話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の意見との相違点・共通点を考えながら話し合う。「○○さんと似ていて～です。」 「○○さんと違って～です。」
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 相手の意図をとらえながら聞く。 自分の考えと比べながら聞き、考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の意見をとらえた上で、事柄が伝わるよう筋道を立てて話す。 「○○さんの意見を聞いて、～と思うようになりました。」 「○○だったから□□になったのだと思います。」 体験と関連付けて話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 立場や意図をはっきりさせて話し合う。「○○さんは～と言っていたんだけど私は～です。」 結論先行で話し合う。「私は～だと思います。理由は～だからです。」

研究の柱Ⅱ つけたい力の検証

定期的に児童アンケートをとりながら、以下の視点にそって検証をしていく。

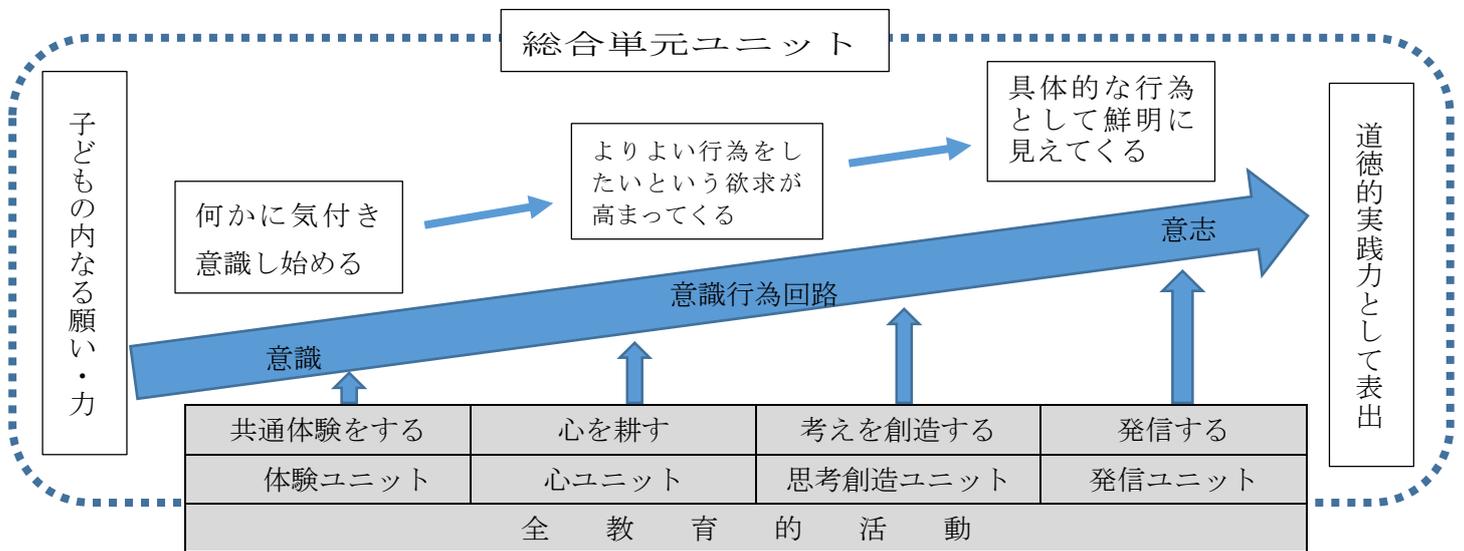
- 視点① 児童は道徳の時間において、友達の考えを聞きながら、自分の考えを発表することができる。
- 視点② 児童は友達の意見をもとに、自分の考えが交流前よりも深まっていると感じている。
- 視点③ 児童は友達を信頼し、自分も友達から信頼されていると感じている。

研究の柱Ⅲ 目的意識のある総合単元ユニット

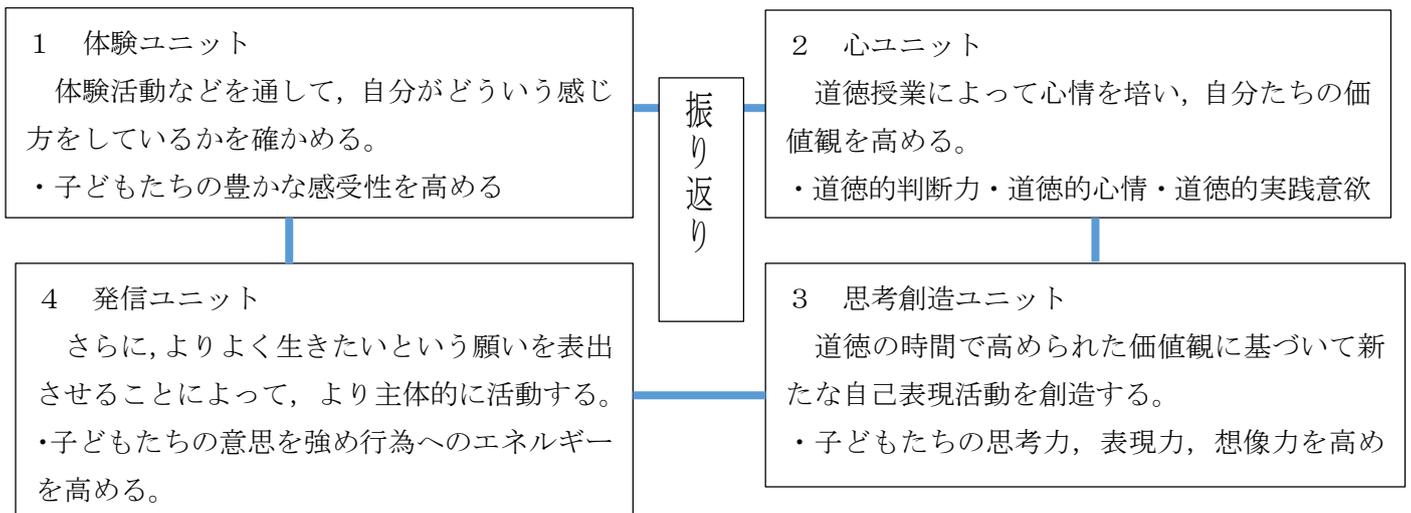
総合ユニットとは、豊かな体験活動を土台として、自己をしっかりと見つめ道徳的価値の自覚を深め、それを表現していくシステムである。

子どもたちがいくら正しい知識を身に付けたり正しい認識をしたりしたとしても、それが抽象的で概念的な理解にとどまり、子どもたちの内面的な自覚をともなった「内からの変化」として具体的に見えてこなければ、本当に自分のものにしたことにはならないだろう。

よりよく生きたいと子どもの内なる願いを引き出し、各ユニットで適切な教育的刺激を加えつつ、総合ユニット方式によって、道徳的实践力として表出する過程を図で表してみた。



道徳の時間の前に、子どもたちがどのような体験をしてきているのか、また、その体験を通して何に気づき、どのような発見をしてきているのかを把握しておく必要がある。子どもたちは今までの体験をもとにして、今の価値観や考え方を認識するからである。



1. 支持的風土の育成

- ・友達のをさを見つけ表現させる場の設定。
- ・グループエンカウンターなどによる学級づくり。

2. 聞く・話す・対話する力の育成

- ・全教育活動を通して「表現する場の」の確保と継続的なみとり
- ・国語科を中心とした言葉の力の育成

3. 心をつなぐ私たちの道德の活用

- ・子ども、担任、保護者が共に見合って心をつなぐノートづくり。
- ・保護者参加型道德。(参観日)

4. 環境づくり

- ・道德コーナー
- ・掲示物の工夫
- ・花いっぱいの学校
- ・全校音楽

道德掲示物の作成例

学習した日付とタイトル

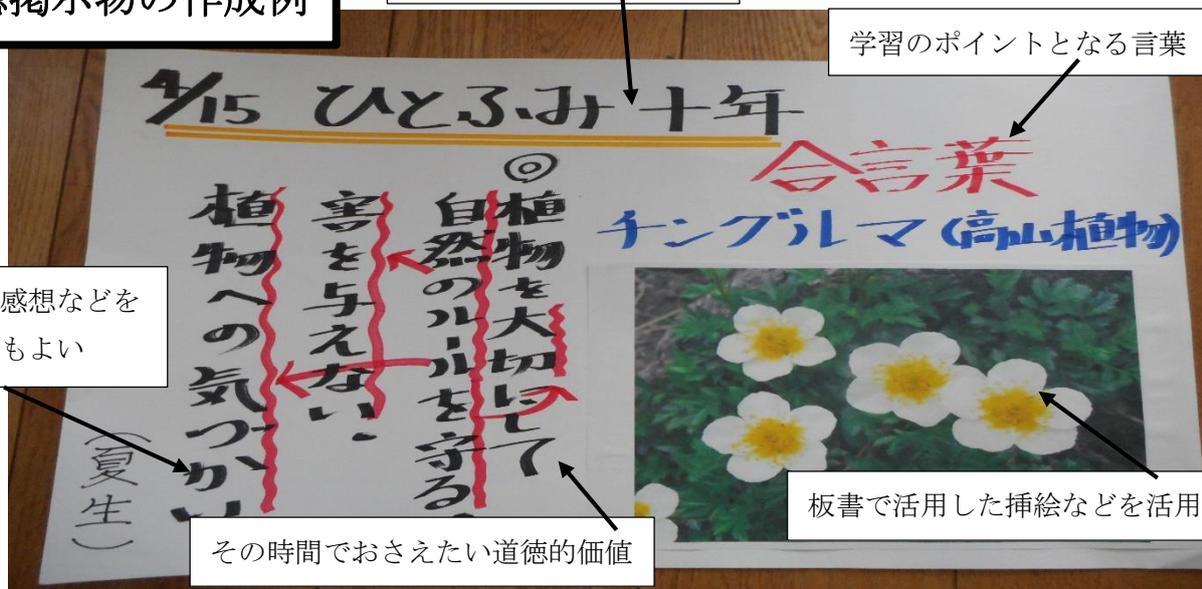
学習のポイントとなる言葉

子どもの感想などを活用してもよい

板書で活用した挿絵などを活用

その時間でおさえたい道德的価値

Aの内容項目は水色 Bの内容項目は薄いピンク Cの内容項目は薄い黄色 Dの内容項目は白の画用紙で作成



今年度の研究計画

★校内研究授業研・・・各学級 道徳の授業を1本公開する。

★実践研究発表会・・・各学級 道徳の授業を公開する。

「総合単元ユニット」を活用した道徳の授業と「私たちの道徳を活用した」授業の両方の指導案を校内授業研と実践研究発表会のどちらかで作成することにより研修を深めていきたい。

※あくまでも基本的な考え方です。

5月研（提案研）	○小林（5-1）	5/15
6月研	○新川（2-1）	6/22 ～ 6/26
7月研	○松本（6-1）（指導主事2次訪問 ※総合単元ユニット）	7/8
9月実践研	（総合単元ユニット）（私たちの道徳）	9/19
10月研	こもれば学級 ○田隈（4-1）	
11月研	○松木（1-1）	11/9 ～ 11/16
全校道徳参観日	全学級 「道徳」	
12月研	ことばの教室 ○伊藤（3-1）	11/16 ～ 11/30
2月研	のぞみ学級 ○磯谷（1-2）	1/27 ～ 2/9